

僕と
彼女と
ありがとう



Mu

僕と彼女とありがとう（1）

「おう、ひさしぶりー」

昼休みに通りかかった玄関前で去年のクラスメイトが声を掛けてきた。

「どう、元気？」

「うん。そっちは？」

「まあ、ぼちぼちかな」

「そっち、担任、誰？」

「体育の岡崎」

「うわー、ご愁傷様」

「え？ そうなの？」

「厳しいらしいぜー」

「やっぱあ。そうなんだ。そっちは？」

「俺の方は音楽のモモちゃん先生」

「なにそれ？ 神様、不公平だ」

「そうかあ？」

「だって、若くてかわいって評判じゃん」

「まあな」

「くそー」

友達の勝ち誇ったような顔を見せられたところで昼休み終了間近を知らせる予鈴が鳴った。

「うわ。もう昼休み終わりだ」

「じゃあ、俺、いくわ」

「うん、またな」

軽く手を振って友達と別れた。他にも生徒たちがあちこちで足早に去っていくのが見える。僕も自分の教室へと急いで歩き出した。

だって今度の二年の教室は玄関からけっこう離れてるんだ。

教室へと続く階段を駆け上がり途中の踊り場を過ぎた時、階段の前方を登っていく小柄な女生徒の後ろ姿が目に入った。

後ろで二つに別けたお下げ髪が、なんとなく見覚えあるような気がする。

うちのクラスかな？ でも、どうだろう？

二年生になってまだ三日目。新しいクラスの女子の大半はまだ顔も覚えていない。

ただ気になったのは、その女子が見るからにあぶなっかしい足取りをしていたからだ。

今にも階段を踏み外しそう。

あの子、大丈夫か？ もしかして気分でも悪いんじゃないのか？

気になってよく見ると、その女生徒は両腕になにか抱えてるみたいだった。

腕の端から高く重ねられた紙束が覗いている。

ああ、プリントか。

彼女が小柄なせいか、けっこうな高さまでプリントが積み上がっている。

そうか、だから足元が見えにくいのか。

そう思った刹那、女生徒が階段に掛けた足を滑らせた。

「きゃあ！」

彼女の身体が傾いて抱えていたプリントが崩れ落ちだす。

「げっ！」

女生徒の傍まで近付いていた僕はとっさに両腕を伸ばした。

片方の腕で彼女の身体を、もう一方の手で落ちていくプリントの束を掴もうとする。

バランスを崩した女生徒の身体が僕の腕にドンとぶつかった。

「おわっと」

僕は足を踏ん張って彼女の体重を支える。それでどうにか彼女も体勢を立て直したようだった

。

おー！ やった！ 我ながらすごいぞ！

落ちかけたプリントも全部掴めたし。

「あ、あの、ごめんなさい……」

踏ん張った自分の足元に視線を落としていた女生徒が慌てたように言う。

「大丈夫？」

僕の声にその子が顔を上げた。

くりっとした目元がすごく愛嬌のある少し幼い顔つきの少女。

あ、そっか。

やっぱりその顔を僕は知っていた。だって、新しいクラスメイトで、しかも隣の席の……

「泉さん？」

「え？ あ、うん。えっと、ごめんなさい、あの……」

「海野だよ。同じクラスの」

「あっ……」

彼女はちょっと申し訳なさそうにその瞳を伏せた。

あー、たぶん、クラスメイトって認識されてなかったんだな。まあ、いいけど。自分だって似たようなもんだからな。

そのまま黙っていると気まずくなりそうだったので、自分から声をかける。

「なんか、すごい量のプリントだね？ なに？ 次の授業？」

「あ、うん、そうなの」

「なんで泉さんが……」

「あの、わたし、今日、日直で」

「ああ、そっか」

そこまで話したところで、さっき掴んだプリントを彼女に返すべきかどうか悩む。

だって、彼女の腕に抱えられたプリントは小柄な彼女の顔の直ぐ下まで積み上がっている。

こりゃ、とても足元なんか見えないだろうな。どおりで、あぶなっかしかったわけだ。

「それ、持ってあげるよ」

言葉は自分でも驚くぐらいごく自然に出た。

「え？」

「プリント。多すぎるだろ」

彼女がちょっと驚いた様に瞳を大きくした。

「あ、でも……」

その瞳が左右に揺れて彼女が躊躇しているのがわかる。

なんだろう？ 遠慮してるのかな？

僕はかまわず彼女の持つプリントの半分ほどを持ち上げた。

だって、このままじゃ、あぶなっかしくて見てられない。

「あ……」

「これで足元大丈夫だね」

僕の言葉に彼女がハッと息を呑んだ。そのまま僕を見つめてくる。

その表情に逆に慌てた。

え？ なに？ なんか変なこと言った？

彼女はそのまま、僕を不安がらせるのに十分なほどの時間、じっと見つめ、それからぱっと表情を変化させた。

まるで花が綻ぶようだった。

「わあ！ ありがとう！ ……海野くん」

その瞬間、ドクンと僕の心臓が強く拍った。

は？ な、なんだ？！

そのままドクンドクンと心臓が騒ぎ始める。

「ありがとうね。海野くんって優しい人なんだね」

「え？ や、な、そ、それほど、でも……」

返す言葉がしどろもどろだ。心臓が喧しい。首筋が熱い。

い、いったい、どうしちゃったんだ、僕？ そう思った。

「どうしたの、海野くん？ 教室に戻らないの？」

「え？ あっ……そうか」

彼女が階段を登り始めた事も気づいていなかった。慌ててプリントを抱えたまま階段に足をかける。

「え？ うわ！」

しまった！ 今度は自分の足が階段に引っかかった。

「きゃあ、あぶない！」

驚いた彼女の悲鳴が聞こえる。

うが！ でもそこは根性で持ちこたえる。

あぶねー。はあ、はあ。

「海野くん、だ、大丈夫？」

「うん、まあ。あは、あはははは」

心配そうに見つめる彼女と顔を見合わせて僕は苦笑いを浮かべた。内心では恥ずかしくて仕方なかったけど。

それでも、まだ心臓のドキドキが止まらなかった。

さっきの彼女の『ありがとう』の言葉が蘇る。その度に心臓が速くなる。

なんなんだよ、これ？ どうしちゃったんだよ、僕？

戸惑いながらそう思った。

後から考えたらこれが、僕と彼女のきっかけだった。

僕と彼女とありがとう（2）

それからなんとなく僕は、彼女——泉さんのことが気に掛かるようになった。

教室の席がたまたま隣だったこともある。あれがきっかけでお互い顔と名前を覚えたこともある。

でも、それだけじゃなく、なぜか気がつくとなんか彼女のことを目で追っていた。

休み時間に友達の女生徒と楽しそうにしゃべっている姿。

昼休みにみんなとお弁当を食べているところ。

もちろん授業中、前を向いていても視界の端に映る彼女の横顔。

だけど、そんなふうに見つめていても、あの時感じた心臓の高鳴りはとりあえず起こらなかった。

なんだったんだろう、あれ？

むしろそれが気になったから、彼女のことを何度も見てしまっていたのかもしれない。

で、そんなふうになんか彼女を見ていてわかったことは、彼女、見かけによらずけっこうそっかしいんだ、ということだ。

例えば、何度か教科書を忘れてきて、授業が始まる前に慌てて他のクラスの友達に借りに行っていることがあった……んだけど。

「あ、あれ？ うわー」

社会の先生が入ってきてみんなが着席したところで、隣から焦った声が聞こえた。

彼女が机の中を覗き込んでごそごそと探っている。

あー、これは、と思った。机の上には筆記用具しか乗っていない。

やっぱり、また教科書忘れたんだろうな。しかも、今気づいたのか。あちゃー、かわいそうに

。

そう思ってチラッと隣を見ると、彼女は青ざめた表情で眉を下げて悄然としている。

うっ。

いきなり胸の奥がツンと痛んだ。その反応に自分でもびっくりする。

でもそれよりも驚いたのは、次の瞬間、僕の右手が自分の教科書を隣の机に差し出していたことだ。

あ？ あれ？

気づいた彼女もびっくりしたように目を丸くすると、僕の差し出した教科書と僕の顔を代わる代わる見つめる。

えーい、こうなったら勢いだ。

「これ、見る？」

「え？」

「教科書、忘れたみたいだから」

彼女の頬がカーと赤らんだ。

「あ、うん、そ、そう、なんだけど……」

なんだか彼女がちょっと困った表情でアタフタしだす。

「あ、でも、海野くんも必要……」

「そこ、どうしたんだ？」

突然教師の声が降ってきた。

うわ！ 見つかった。

みんなが一斉にこっちを振り返る。彼女の肩がビクンと跳ねた。その瞳が焦ったように揺れる

。

やばいな。注目されちゃ、彼女、パニックになるかも。

僕は思い切って手を挙げた。

「先生！ あの、教科書忘れたんで、隣の人に見せてもらっていいですか？」

「え？」

隣で彼女が息を呑むのがわかった。それから気がついたように、あわてて彼女が声を上げる。

「あ、その、忘れたのは、わ……」

「泉さん、見せて！」

僕は強引に彼女の言葉を遮る。

「なんだ、海野。時間割間違えたのか？ 新学期そうそうだからって、ちゃんとしろよ」

「はい、先生」

教師はそう言うとおっさりと板書のために背を向けた。

ふう。なんとかセーフ。

よし。これでこそこそせずに彼女に教科書を貸せるぞ。

そう思ってもう一度彼女を振り返ると、ビックリした表情の彼女が僕を見つめて固まっていた

。

「あー、とすることで……」

僕はちょっと苦笑いしながら、

「机くっつけようか？」

「……あ、えっと、うん」

彼女は思い出したようにようやく動き出す。

お互い少しずつ机を寄せて、教科書をその真ん中に。

それから彼女がもう一度僕を見た。

「あの、海野くん」

「うん？」

見つめる僕の前で彼女の表情が花の咲くように綻ぶ。

「どうも、ありがとう！」

「あっ」

ドクンと心臓が大きく跳ねた。

ああ！ まだだ！ また、始まった。

とっさに胸を押さえそうになる。でも、彼女がまだ見つめているのに気づいて必死で我慢した。なぜかカーと首筋まで熱くなってくる。

僕はわけもわからず彼女から顔を逸らした。

「……うん。べ、別に、いいよ、そんなの」

声が不自然に揺れた。今度も、心臓のドキドキが直ぐには治まらない。

なんなんだ？ どうしてこんなになるんだ？

なんだか自分でもよくわからなかった。

ただ、彼女に『ありがとう』と言われただけなのに。

それでも、この感覚はいやじゃなかった。いや、むしろすごくくすぐったくて、とてもいい気分だ。

なんだかクセになりそうだな。いや、まさか。あははは。

えーと、白状すると、実はその後、彼女の『ありがとう』は……本当にクセになってしまった。

あ、いや、変なやつとか言うのやめて。

だ、だって、あの後も、そそっかしい彼女を放っておけなくて何度もフォローをしたんだ。

そしたら、その度に彼女があの花のような笑顔で『ありがとう』と言ってくれて、

それを聞く度に僕はいつも心臓がドキドキして気持ちよくて、

だから、その快感がすっかりクセになってしまったわけで……な、し、仕方ないだろう？

でも、だからと言って彼女に無理矢理言わせたりなんかしてないよ。そんなことする必要もない。

だって、彼女ってほんとにそそっかしいのだ。

あれからも教科書を忘れたのは一度や二度じゃなかったし。

授業中、机の上から消しゴムとか鉛筆とか、よく落とすし。

その度に拾って渡すと、いつもの笑顔で『ありがとう』と言ってくれるんだ。

それだけでドキドキ気持ちよくなれるのなら、そりゃ、やっぱり拾うよね。

まあ、ひそかに彼女より先に落ちたものを拾う努力はしてるけどさ。

でもそれも、自分が気分よくなるためだから、ある意味当然。そうだろう？

そんなこんなで授業合間の休み時間。

気持ちよい風が吹き込む窓枠に腰掛けてひそかに彼女を見つめていると、なんだか彼女が筆箱をひっくり返しだした。

あー、これはあれだな。きっとシャーペンの芯が切れたんだ。

彼女の筆箱の中に換え芯は……なさそうと。うん。じゃあ、仕方ない。

僕は自分の机に戻ると、すっと無言で自分の換え芯ボックスを彼女に差し出す。

彼女がちょっと驚いたように僕の手元の換え芯を見つめ、それから首を傾げた。

あれ？ いつもと違うぞ。いつもなら、すぐ花のような笑顔が浮かんで……

「あの一、海野くん？」

彼女がいつもと異なる真剣な表情で聞いてくる。

「え？」

僕は戸惑った。

なんだ？ どうした？

「海野くんって、もしかしたら……わたしのストーカーしてるの？」

「ち・が・うー！」

いやいや、違うから。そこは思いっきり否定させてもらいたい。

「だって、わたしが芯探してるの、どうしてわかったの？」

「いや、見てればわかるから」

「ずっと見てたの？」

「え？ いや、その、ずっとってわけじゃ……」

けっこうずっと見てたけど。

「本当？」

彼女が疑わしそうに尋ねる。背中を汗が流れ落ちた。

「う、うん、本当だよ」

「でも、海野くん、よくわたしのことタイミングよく助けてくれるじゃない。それって、なんでかなあとって」

「うっ……」

とっさに言葉が出ない。言われてみたら確かに僕の行動って、ストーカーみたい？

「い、いや、その、なんだか、ほっとけなくて……」

とっさに口を突いて出たのはそんな言葉。

「え？ どうして？」

彼女が怪訝な表情を浮かべる。よせばいいのに焦った僕の口から言葉が勝手に滑り出す。

「あ一、なんて言うか、泉さん、そそっかしくて危なっかしいから……」

「ええっ！」

彼女の頬がさっと染まった。そのまま恥ずかしそうに俯いてしまう。

うわー。まずい！ まずい！

なんてこと言っちゃったんだ僕は。

自分の失敗に気づいて、焦る、焦る。

うわ！ えーと、なんて言ってフォローしよう。どう言ったらいいんだ？

少しぐらいそそっかしい方が、女の子はかわいいよとか？

いや、ダメだ。そんな恥ずかしいこととても言えない。

えーと、僕はそんなそそっかしい子の方がステキだと思うとか。

いやいや、やっぱ無理があるだろう。

うー、どうしよう。どうすりゃいいんだ？！

必死に頭を悩ませている僕の前で、俯いていた彼女がゆっくりと顔を上げた。その頬が真っ赤に染まっている。

「あー、恥ずかしいなあ」

彼女は呟くように言ってから言葉を続けた。

「でも、やっぱりわかっちゃうよね。わたしがそそっかしいの」

彼女は照れた笑顔を浮かべた。

ああ……ホッとした。どうやら怒らせてはいないみたいだ。

「えっと、あの、まあ……」

さて、ここで彼女の言葉を否定すべきかどうかよくわからずに僕は口ごもる。彼女が続けた。

「わたしも、この性格どうにかしようと思ってるんだけど、なかなか治らなくて……」

いやいやいや、そこはむしろ、そのままでいいから。

「あー、大丈夫だよ。たいていのことはフォローできるから」

「そんなあ。それだと海野くんに迷惑だよ」

いやいや、もっとやってください。

「あー、僕、気にしないから。泉さんも気にしなくていいよ」

「ほんとに？」

「うん」

彼女はちょっと思案顔で宙を見つめてから答えた。

「そう言ってもらうと、心強いな。ごめんね、また教科書とか忘れたら頼りにしちゃうかも」

「うん。任せて」

僕はドンと自分の胸を叩く。今度こそ彼女の顔が綻んだ。

「うん。ありがとう」

瞬間、ドキドキと胸が高鳴る。

あー、快感。やっぱり、クセになってるよ。

僕と彼女とありがとう（3）

「あのね、海野くん、今日放課後、時間ある？」

そんなこんなで日々彼女の『ありがとう』を聞くために、密かな努力を続けていたある日の昼休み。

ゴールデンウィーク前のざわつく教室で隣の席から彼女が顔を寄せてきた。見ると妙に真剣な表情をしている。

「えっと、なに？」

「あ、あのね……」

話しかけた彼女は少し迷っているような素振り。

なんだろう？ またなにかトラブル？

「ちょっと、話したいことってというか、海野くんに相談したいことがあって……」

「ふ～ん」

わざわざ放課後に相談したいことってなんだろう？ 僕は心当たりを考えてみる。

ひょっとして通学路でなんか落とし物でもしたのかな？ それを一緒に探して欲しいとか？

それともなんか毀してしまって困ってるとか？ よくわからないけど……

改めて彼女を見ると、少し不安そうな表情で僕を見つめている。

あー、うん。なんでもいいや。

彼女が困ってるんなら、なんとかしてあげなくちゃな。

だって、そしたらまた彼女の『ありがとう』が聞けるに違いない。

「うん。いいよ。わかった」

「本当？」

彼女はホッとしたように表情をゆるめた。ほら、今だって。期待で胸が高鳴る。

「海野くん、ありがとう」

彼女がにっこりと笑顔で言ってくれる。

やった！ いつもの胸の高鳴りが心地よかった。

放課後。なんだか、変な期待に最初からドキドキと胸が高鳴っている。約束した校門前で彼女が待っていた。

「ごめん、遅れたかな」

「ううん。じゃあ、こっちな」

彼女が直ぐに校門を出て歩き出す。

ああ、やっぱり、落とし物でも探すのかな？

そう思って彼女の後を付いていく。でも彼女はそのままにも言わずどんどん歩いていった。

あれ？ 違ったかな？

僕は怪訝に思って声をかけた。

「泉さん、えっと、どこ行くの？」

彼女が振り返る。

「あ、その、二人でゆっくり話せるところ」

「え？」

ちょっと面食らった。落とし物捜しじゃなかったのか。じゃあ、いったいなんの話なんだろう？

疑問に思いながら、彼女に導かれて通学路から少し奥に入った小さなコーヒーショップに着いた。

「ここ？」

「うん」

僕は店に入ると注文したコーヒーを受け取って空いていたテーブルに向かい合わせに座った。

真っ正面から見る彼女の素顔。あー、なんか緊張してきた。だって、二人っきりで学校以外の場所にいるなんて初めてだ。

一体全体、なんの話なんだろう？

相談があるといった彼女はでも、俯き加減でアイスコーヒーに挿したストローをいじっていても何も言い出さない。

「ええっと、海野さん？」

緊張に耐えきれず彼女の名前を呼ぶと彼女の肩がビクッと震えた。

え？ 彼女も緊張してる？

そう思うと、なんだか自分も緊張が増してきた。

うわ！ なんでこんなに緊張してるんだ、僕？

この緊張から早く逃れたくて言葉を繋ぐ。

「えっと、あの、相談って、なに？」

彼女がようやく俯いていた顔を上げて僕を見た。その瞳が揺れて頬が緊張からか赤く染まっている。

「あ、あのね、海野くん」

「う、うん」

「実は、相談したい事って言うのは……」

「言うのは？」

「……恋の話なの」

「へ？」

思いもしなかった言葉を聞いて一瞬固まった。それから心臓が騒ぎ出す。

こ、恋の話？ それって、いったい……。

心臓のドキドキが急速に速くなる。でもそれは、いつもの心地よいドキドキとは違って……。

「そ、それって、どんな……」

喉が詰まった。

「あの、わたしね……その、好きな人が……いるの」

ドクン！ と胸が跳ねた。

え？ え？ それって、もしかして……。

心の中であり得ない想像が浮かぶ。

彼女の好きな人……それって、もしかしたら……ひょっとしたら……万が一にも……ぼ、僕？
そう思った瞬間、心臓が爆発した様に加速する。胸の鼓動が直接耳に流れ込んできて耳が痛い

。

「あ、あの、それって……」

尋ねたくても、それ以上なにも言えず、僕は彼女を見つめた。

彼女は頬を真っ赤に染めて、照れた顔を見せたくないのか前髪を手で押さえながらチラッと僕を見る。

その視線！

頭がくらくらしそうだった。もう、じっとなんかしてられない。

なんでだ？ なんでこんなに僕は舞い上がってるんだ？！

その答えにたどり着きかけた時、彼女が口を開いた。

「えっと、あのね、わたし……クラブの先輩が好きなの」

「……は？」

聞いた瞬間、胸の中のどこかが凍り付いた。あれほど熱くなっていた身体がスーと冷えて寒気が走る。爆走していた心臓が止まった気がした。

……彼女の好きな人は……クラブの先輩。……先輩、なんだ。

あは、あはははは。そ、そうだよな。僕のはずがないよな。あはは。な、なに考えてるんだろう僕。

頭からプシューと何かが抜けていく。さっきまでの緊張が一気に解けた。

「……そう、なんだ」

「う、うん」

彼女が照れた笑顔を見せて肯いた。その瞬間、胸にズキリと痛みが奔る。

あ、あれ？ どうしたんだ、僕？ なんでこんなに胸が苦しい？

「そ、それでね、海野くんに相談なんだけど……」

彼女が言葉が続けるのが聞こえる。

僕に相談？ 好きな人のことを？ なんで？ どうして……僕になんだ？

「それでね、もうすぐ先輩の誕生日なの。だから、その、先輩になんか……プレゼントしたいなあと思って。……でも、男の人ってどんなものが欲しいかよくわからなくて……それでね、海野くんだったら、なにもらったらうれしいかなあ、とか、聞かせてもらえたらいいなあ、て……」

ああ、そう言うことか。

彼女がおずおずと、でも楽しそうに話すのを聞きながら僕はなんだか不機嫌になっていた。

どんなプレゼントがいいか、僕に聞きたいって？ でも、そんなもの、僕にわかるはずないじゃないか。

だって、僕は先輩じゃない。僕の欲しいものなんか言ったって、絶対先輩にわかるわけがない。

だって、僕の欲しいのは、僕が君から欲しいのは……あの言葉なんだから。だから……

「わ、わかんないよ。そんなの」

答える言葉がぶっきらぼうになる。それを敏感に感じ取ったのか、彼女がちょっと気まずそうな表情をした。

「あ……そ、そうだよ。こんなこといきなり言われても、困るよね」

目を伏せて彼女はまたコーヒーのストローをいじくりだす。氷がグラスに当たってカランコロンと音を立てた。

僕はなんで自分がこんなに怒ってるんだろうと、自分でも不思議だった。さっきから目まぐるしく変わる自分の心がわからない。

どうしてこんな気分になってるんだ？ どうして僕の心はこんなにぐちゃぐちゃになってるんだろう？

彼女の話をおかしいして、彼女の好きな人が勝手に自分だと思い込んだからか？ それが間違いだったことに腹を立てたのか？ そんなの、自分勝手すぎるじゃないか。

それに、彼女が誰を好きになろうと、それは彼女のかってだろう。なんで、怒るんだよ？

それとも、おまえは彼女の恋人になりたいのか？

そう思った瞬間、それまで止まっていた心臓がドクンと音を立てた。

え？ あれ？

自分でも思いがけなく動揺する。胸がキュッと痛んだ。

ああ、と思った。

そうか。ようやくわかった。

でも、その時。

「ご、ごめんね」

「え？」

彼女が顔を上げて僕を見つめていた。その表情がビックリするほど落ち込んでいる。

「海野くん、こんなこと相談されて迷惑だったよね。ごめんね、わたし、気がつかなくて」

「あ、いや、あの……」

「でも、わたしひとりじゃ自信がなくて、誰かに相談したくて……その、海野くんだったら、わたしの相談に付き合ってくれるかな、と……甘えちゃったの」

彼女が精一杯の作り笑いを見せる。胸がズキズキと痛んだ。

こんな悲しそうな彼女の笑顔。見ていられない。

だって、僕は彼女のことを……好きになってたんだ。

こんな時だというのに、わかってしまった。いや、こんな時だからなのか？

目の前の彼女が肩を落とした。胸の痛みがひどくなる。だから
「……い、いや、いいよ。大丈夫。僕でよければ相談に乗るよ」
そう言ってしまった。

「ほ、本当？」

「……うん」

彼女の表情がぱっと明るくなる。

「海野くん、ありがとう」

ズキンと胸の奥が痛んだ。いつもの言葉。彼女の『ありがとう』

なのに、今までとはまったく違う。その言葉が胸に刺さる。まるで心臓が切り刻まれるようだった。

でも結局僕はその後、彼女の相談に乗って先輩へのプレゼントをいろいろ考えた。

クラブで必要そうな小物や男子の好きそうな食べ物。

けれど、その間中、胸がズキズキと痛みを訴えた。

ようやく終わって店を出る時、

「海野くん、今日はほんとに、ありがとう」

彼女がもう一度うれしそうに僕に告げる。その言葉がまた僕の胸に突き刺さった。

「……うん。ちゃんと渡せたらいいね」

精一杯強がりと言う。そうしないと立ってられなさそうだった。

彼女はプレゼントを渡す時のことを想像したのか、幸せそうな笑顔で「うん」と答えた。

その笑顔を見つめながら、僕はもう二度と今まで通りの気持ちで、彼女の『ありがとう』を聞くことはできないのだと感じていた。

僕と彼女とありがとう（4）

ゴールデンウィークはリハビリ期間だと思った。しばらく彼女の顔を見ずにすむ。だからこの間に彼女の『ありがとう』を聞かずにいられる身体に戻ろう。そう思った。

それにしても、僕はなんて間抜けだったんだろう。

僕の恋は始まる前に終わってしまった。

もっと早く自分の気持ちに気づいていたら、そうしたら……なにか変わってたのかな？

正直、自信はなかった。でも、もしかしたら……もっと違った形になれていたかもしれない。

でも……

あー、ダメだ。うだうだと余計なことを考えてしまう。忘れようと思っているのに。

もう、考えるな。彼女のことなんか。

だけど……そう思う端から、彼女の顔が脳裏に浮かんでくる。

何度も何度も聞いた彼女の『ありがとう』

その時の花のような笑顔。

胸のときめきまでもが鮮明に蘇ってくる。

だってその言葉が聞きたくて、その笑顔が見たくて、僕は頑張っていたのだ。

あれが恋だったのにも気づかずに。あの胸の高鳴りを感じたくて……。

あー、くそう。まただ。また、余計なこと思い出してる。

ダメだ。ダメ。もう忘れよう。忘れてしまおう。そう何度も自分に言い聞かせた。

「おはよう、海野くん、元気してた？」

「あ、うん。おはよう、泉さん」

ゴールデンウィーク明けの朝の教室で久しぶりに彼女と顔を合わす。笑顔が眩しくてまともに見れなかった。

「ああっ、緊張するなあ」

トンと隣の席に座った彼女が小さく呟くのが聞こえた。

「え？」

思わず彼女を振り返る。僕の方を見ている彼女と視線が合っ、ドキッとする。

「な、なに？」

「あのね、今日……」

彼女は声を潜めて僕に告げる。

「先輩に……渡すの」

「あっ」

胸がキュッと締め付けられた。

くそ。ダメだ。全然平気になってないじゃないか。

僕は自分の心臓をののしる。

「今日、だったんだ……」

辛うじて言葉を返した。

「うん。海野くんのおかげでプレゼント用意できたから……」

「そ、そう。……よかったね」

彼女の夢見るような笑顔。胸の鼓動が重くなる。

「でも、ああ、すごく緊張する。わたし、ちゃんと渡せるかなあ？」

彼女が少し弱気な笑顔を見せた。僕は早くこの話題を切り上げたくて言葉を口にする。

「大丈夫。ちゃんと渡せるよ」

「そうかなあ」

彼女は少し不安げに首を傾げ、それから思い直したように肯いた。

「うん。そうだよ。頑張ってみる」

そう言って浮かべた彼女の笑顔が胸に苦しい。

「海野くん、勇気つけてくれて、ありがとう」

その言葉は僕に、もはや痛みしか与えなかった。

その日一日、僕は授業なんかまったく聞く余裕がなかった。

早く今日が終わって欲しい。彼女が先輩にプレゼントを渡せるかどうかなんてどうでもいい。渡したあとの彼女の笑顔を見たいとも思わない。

ただ、早く過ぎ去って欲しかった。だから、彼女がいつ先輩にそれを渡すつもりなのかとも聞かなかった。

「よ、海野、ひさしぶり」

「あ、ああ……」

昼休み。教室にいたくなくて校舎を彷徨っていたらひさしぶりに一年の時のクラスメイトに遭遇した。

「どう？ 一月たって。そっちの担任、やっぱりきびしい？」

「うーん、そうでもないかな？」

「そりゃ、よかったな」

「そっちこそ、モモちゃん先生だろ」

「それが聞いてくれよ。モモちゃん、めっちゃきびしいんだぜ」

「へえ、そうなのか？」

「ああ。怒ったら、すごいなんの。まじ、びびったぜ」

「へえ」

「クラスの女子なんか、泣き出しそうになってたな」

僕は音楽の女性教師を思い浮かべる。

音楽専攻じゃないから一度も授業を受けたことがないけど、かわいい顔の優しそうな先生だ。

ふーん、人は見かけによらないもんだな。とか思っていると、

「そう言えば」と友達が続けた。

「泣き出しそうでしたけど、さっき俺ちょっとヤバイ場面見ちゃったよ」

「ヤバイ場面？ なんだよ、それ？」

「それがさ、女子が泣き出しそうだったんだ」

「へえ、なんで？」

彼が声をひそめる。

「いや、俺も通りがかりに少し聞こえただけだから、よくわかんねえけど……女子が男になんか渡そうとして断られてたみたいなんだ」

「え？」

ビクンと心臓が跳ねた。

なにそれ？ それって、もしかして……い、いや、まさかな。

でも、脳裏によく知っている女の子の顔が浮かんだ。

「そ、それで？」

尋ねる声がぎこちなく震える。

「俺、気になってひょいと見たら、去っていく男を見てる女子の背中がなんだか震えててさあ」

今度こそ心臓が早鐘を打ち始めた。息が苦しくなってくる。

「あれって、泣き出したんじゃないかと……」

「どこ？」

「え？」

「どこで見たんだ！」

思わず大声を上げていた。

「え？ えっと、体育館に行く渡り廊下の角だったけど……」

「ごめん、また、今度な！」

僕は後ろも見ずに駆けだしていた。

自分でもなんで駆けだしてるのかわからなかった。

その女生徒が、もし自分の知っている彼女でも、失恋してしまった今、もはやどうでもいいことのはずなのに。

でも……もし、彼女だとしたら、彼女が泣いてるのだとしたら……そう思っただけで足が勝手に動いた。

廊下の突き当たりの出入り口から校庭に飛び出す。

中庭を挟んで反対側の校舎からグラウンドの端の体育館へと通じる渡り廊下が見えた。

駆けだした勢いのまま中庭を突っ切る。

渡り廊下がぐんぐん近づく。

どこだ？ どこにいるんだ？

ぱっと見、誰の姿も見えなかった。

その事実に頭の片隅にようやく冷静な自分が蘇ってきた。

もしかしたら、人違いかもしれない。いや、その可能性の方が大きいだろう。

それなら、このまま探し回って、知らない女の子が泣いていたら、すごく気まずい。

その思考が僕の足に急ブレーキを掛けた。体育館手前で立ち止まる。

そこでもう一度、きょろきょろと周りを見渡した。

誰もいなかった。

扉の開いた体育館の中から、運動部の昼連のかけ声が聞こえている。

.....いないな。もう、どこかへ行ってしまったのかな？

それに、やっぱり違う人だったかもしれない。

だって、彼女が先輩に渡そうとしているのは単なる誕生日プレゼントだし。渡せなかったなんて事はないだろう。きっと楽しく先輩に渡せたはずだ。

そう思った途端、胸がきりりと痛んだ。

ええい。くそ。

無理矢理その気持ちを叱りつける。いつまで気にしてるんだ僕は。

ああ、もういいや。戻ろう。

けれど、教室でプレゼントを渡し終えた笑顔の彼女がいるかもしれないと思うと、足がすぐに動かない。

仕方ないな。もう少しだけ。

そう思いながら、渡り廊下を横切って、人気のない体育館裏に回ってみる。

そこに誰もいないことを確認したら、そしたら教室に戻ろう。

そう心に誓った。なのに。

「あっ」

その姿を目にした瞬間、僕の頭は真っ白になった。

誰もいないひっそりとした体育館裏。

その建物の壁に背を持たせかけながら、少女がひとり、俯きながら立っていた。

——僕がよく知っている女の子だ。

力なく肩を落とした姿。彼女の全身が悲しみを漂わす。

お腹辺りで何かの紙袋を大切そうに抱えていた。

やっぱり、そうなのか？ 渡せなかったのか？

胸が締め付けられた。

僕はゆっくりと彼女に近づく。

もし少しでも驚かしたら、彼女がどこかに消えてしまいそうな気がした。

そうなる前に少しでも彼女に近付きたかった。

近づくにつれて、彼女の肩が小さく震えているのがわかった。ハッとする。

僕はこんな彼女の姿を見ていいんだろうか？ こんなとこ、見ちゃいけないんじゃないのか？

彼女だってこんな姿、見られたくないんじゃないか？

逡巡で踏み出した足が止まる。

このままそっと帰ってしまおうかと思った時、降ろした足が踏みしめた枯れ枝が音を立てた。

彼女がハッとされたように顔を上げる。目が合った。

僕はその場から動けなくなった。彼女の瞳が泣き濡れて赤く充血していたからだ。

「あっ」

驚いたように彼女が目を見開く。目蓋からポロリと涙の雫が零れ落ちた。

「あ、ああ、海野くん……な、なんで、ここに？」

彼女は一瞬呆気にとられ、それから思い出したようにあたふたと慌てて目元を手で覆う。

僕は動くことも出来ず彼女を見つめた。

彼女は手の甲で急いで目元を拭いながら、無理矢理笑顔を作った。

「な、なんで、わたしのいるとこわかるのかなあ。あは、やっぱり、ストーカー？」

僕はそんな彼女が痛々しくて目を逸らそうとして、でも、彼女の手元の紙袋から目が話せない。言葉が勝手に口をついて出た。

「渡せなかったの？」

言った瞬間、彼女の手から紙袋が地面に滑り落ちる。

「ああっ」

彼女は慌ててしゃがむとその紙袋に手を伸ばした。

なに聞ってるんだよ！ 心のどこかが叫んだ。

そんなこと聞いてどうするんだよ。おまえにはなんにも出来ないくせに。彼女のために出来る事なんてなにもないだろう。

だけど……聞かずにおれなかった。

僕はしゃがんで袋を拾った彼女のそばに立った。彼女はしゃがんだまま俯いてなにも言わない。

「どうして？ 先輩に切り出せなかったの？」

「.....ううん」

ようやく彼女が口を開く。でも、俯いたままだ。僕はかまわず言葉を続ける。

「じゃあ、先輩が受け取ってくれなかったの？」

「.....うん」

「なんでだよ！」

自分でもビックリするぐらい大きな声が出た。彼女も驚いたのかビクッと体を震わせる。僕の胸の中で何かが急速に膨れあがる。

「なんだよ。なんで、受け取ってくれないんだよ。泉さんの大切なプレゼントなのに。そんなのおかしいよ」

彼女の身体が震え出す。また悲しさが蘇ってきたんだろうか？ でも.....それでも、僕は止まらなかった。

「泉さん、僕が、先輩をもう一度呼んできてやるよ。今度は絶対受け取ってもらおう。だから、ここで待ってて！」

「ダメなの！」

しゃがんでいた彼女が突然立ち上がった。泣きはらした瞳が僕を見つめてくる。グッと胸が締め付けられた。

「どうして?! 誕生日のプレゼントぐらい、受け取ってくれるだろう！」

「だから.....ダメだったの」

「なんで！」

僕はわけもわからず叫んだ。彼女は目を伏せて震える声で言った。

「だって.....失恋したから」

「え？」

その瞬間、心臓が凍り付きそうになった。

なに？ なんて言った彼女？失恋した？ それって.....

啞然として固まる僕に彼女がぽつりぽつりと話し始める。

「先輩に.....告白したの。プレゼント渡す時に.....好きですって.....でも、そうしたら、受け取れないって.....そう言われて.....」

「な、なんで？」

聞いちゃいけないと思っても言葉は勝手に口をついて出る。

「.....先輩、付き合ってる人がいたの。だから.....」

彼女の言葉が途切れた。

ああ、と思った。そうなのか。彼女の想いは実らなかったんだ。僕と同じように。

胸がきりきりと痛む。あの悲しみを彼女も味わっている。それだけで、自分の心臓がまた引き

裂かれそうだった。

それ以上なにも言えず俯いたまま肩を震わせている彼女。僕はなんて声を掛ければいいのかからなかった。

いつか、もっといい人が見つかるよ、だろうか？

それとも、そのうち忘れられるから、だろうか？

.....無理だ。そんなこと、嘘だと言うことは自分が一番知っている。

だから、声を掛けることも出来ず、ただ、彼女のために出来ることを探して、ようやく思いついて、僕はハンカチを差し出した。

彼女は俯いていた顔を上げて僕を見つめると、無言でそのハンカチを受け取った。それから目を僕のハンカチで覆い隠す。

僕は黙って彼女の傍で壁に背を預けた。目の前のフェンス越しに田舎の風景が広がっている。そろそろ田植えの時期なんだろう。水がいっぱいに張られた田んぼがいくつも見えた。

心にはいろんな思いが渦巻いていた。驚き。悲しみ。悔しさ。怒り。でも、その中で一番は、心配だった。

彼女のことが心配だ。このまま放っておけない。

たとえ、僕は失恋したのだとしても、このまま彼女のことを黙って見過ごすなんて出来ない。この先知らん顔で関わらないで過ごす事なんて出来るわけがない。

そう思った。だから、

「泉さん、大丈夫だから.....」

「え？」

彼女が僕を振り返る。その手に僕の渡したハンカチ。ようやく涙は止まったように見えた。

僕はそんな彼女を見つめながら言葉を続ける。

「これからも僕はいるから」

「あっ」

彼女が驚いた表情を浮かべる。

「困ったことがあったら、今まで通り、いつでも僕が相談に乗るから。だから.....大丈夫」

「.....海野くん」

彼女の瞳がもう一度潤んでくる。でも、彼女は直ぐに僕のハンカチで頬を拭くと、今度は、涙の残る顔に花の綻ぶような笑顔を浮かべた。

「うん。わかった。ありがとう、海野くん」

今まで何度も聞いたその言葉。

でも、この時のその言葉は僕の胸の奥深くまで染みこんで、決して忘れられそうになかった。

*

「ちょっと、泉さん、前！ まえ！ よく見て！ うわ、あぶない！」

「え？ え？ あっ」

僕は彼女の腕を掴んで引き留める。目の前に廊下の出っ張った柱が立っていた。

「ふう、セーフだよ」

「えっと……」

両腕にうずたかくプリントを抱えた彼女が僕の方を振り返る。

「泉さん、今日、日直だっけ？」

「あ、うん、そうなの」

「だから、そう言う時は僕に相談してって言ってるじゃん」

「あー、うん、ごめんね。でも、大丈夫だと思った……」

「これで？」

「……んだけど、やっぱり無理だったみたい」

彼女が申し訳なさそうな笑顔を浮かべる。

「仕方ないなあ。じゃあ、半分持つよ」

僕は彼女の腕からプリントの山を持ち変える。

「海野くん、いつもいつも、ありがとうね」

その言葉が僕の胸を切なく揺さぶる。でも、それにももうだいぶ慣れた。

あれから、二ヶ月。

僕はいまでも相も変わらず彼女の世話を焼いている。

だって、そそっかしい彼女を放っておけないから。

彼女の『ありがとう』がクセになってしまったから。

その言葉は様々に形を変えて、それでも、今も僕をとらえて放さないから。

だから、きっと、これからも……

「あのね、海野くん」

プリントを持って並んで廊下を歩きながら、彼女が僕に話しかけてくる。

「今日、放課後、時間ある？」

「え？」

そのフレーズに一瞬驚いて顔を向けると、彼女がなんだか恥ずかしそうに僕を見つめている。

「えっと、たぶん、大丈夫、だけど……」

「あのね、実は、海野くん……話したいことがあるの」

それだけ言って彼女は俯いた。夏服の制服から覗く白い首筋がなぜかピンクに染まっている。

なんだろう？ また、相談事？

でも、まさか、今度は前みたいな恋の話じゃないだろう。そう思って僕は肯く。

「うん。いいよ。相談に乗るよ」

彼女がぱっと顔を上げる。はにかんだように赤く染まった頬が花が咲くように綻んだ。

「ありがとう、海野くん」

ああ、やっぱり僕は彼女が好きだ。

その日の放課後、彼女の話に僕は……初めて彼女に『ありがとう』を返すことになった。

おわり